

『たすけあい』の精神

青森市立西中学校3年 小野由衣花

中学2年のお盆の日、私は、祖父母の小さな畑に遊びに来ていた。数日前に2人が収穫したじゃがいもを車に積み込みながら、祖母が笑顔で話し始めた。

「この間、畑の倉庫の近くに小さなへビが出たんだよ。」

私はとても驚き、へビが苦手な祖母がどのようにその場を乗りきったのか尋ねると、

「近くに住む親戚の人を呼んで、側溝に逃がしてもらったんだよ。」

と祖母が教えてくれた。

このように祖父母が親戚の方たちに助けてもらうことは少なくない。逆に、りんごの時期になると、祖父母は毎年、農家の親戚の作業を手伝いに行く。私の兄も、数年前からそれに参加している。

『たすけあい』が、こんなにも身近な場所に存在するのだと、私はこのとき初めて気づき、はっとした。相手に見返りを求めるわけでもなく、「家族だから」、「親族だから」という理由だけで人はたすけ合っている。それも、当たり前のように。これは、決して簡単なことではないと思う。助けられたら、その分、手間や時間を惜しまずに相手を助ける、『たすけあい』の精神が必要である。

しかし、私は今までこのような経験をしたことがない。家の中でも、他の誰かにやってもらおう、などと考えて、庭の花の水やりや風呂掃除など、簡単にできることも他人に任せてしまうことが多い。私は、いつも父、母、兄に助けてもらいながら生活している。一番小さな社会でもある「家族」のなかで、助けてもらったことを少しずつでも返していくためにも、まずは家での行動を見直し、『たすけあい』の精神を育んでいきたい。

また、家族や親族などの身近な人たちだけでなく、視野を広げてみることも大切だと思う。日本は、地震や台風、豪雨などが多く、毎年のように大きな被害を受けている。今まで日本がこのような状況を何度も乗り越えることができたのは、やはり『たすけあい』の精神があったからだと思う。現在でも、大きな災害が起こったときには多くの方々がボランティア活動に参加している。また、忙しい人や遠い地域に住んでいる人でも、食料や水の支援、募金などの形で被災地を助けるお手伝いをすることもできる。

大切なのは、困っている人に目を向け、自分にできることは何か考えることだと私は思っている。そして、見返りを求めずに行動することで、『たすけあい』が広がっていく。『たすけあい』で成り立っている社会で、今、私ができることは何かを考え、また、助けられながら生きていることへの感謝の気持ちを胸に生きていきたいと思う。